

榎木野衣著 『戦争と万博』

波瀾
剛

「戦争はまだ続き、万博は繰り返される。戦前に計画された紀元二六〇〇年博と一九七〇年の大阪万博 EXPO'70 を結ぶ、都市計画家、建築家、そして前衛芸術家たちの、終わりなき「未来」への夢の連鎖のなかに「環境」の起源をたどるタイムトラベル的異色長編評論。」(本書帯より)

たしかに本書は戦争、万博、そして前衛芸術のつながりをスリリングにたどった「タイムトラベル的異色長編評論」である。本書で次々と明らかにされる事実は、これまでは点と点でしかなかったように思える三者を結び、それはやがて線、そして面となって浮かび上がってくる。

まず私にとつて興味深かったのは、一九七〇年の大阪万博に閑閑としていく芸術家や作家たちと戦争、とくに「原爆」との接点が少なからず存在するという点である。たとえば、第一章で取りあげられる小松左京の場合、代表作『日本沈没』に展開される終末論的思想が、原爆投下直後の広島で救助活動をした建築家浅田孝の思想に影響を受けているという指摘がある。また、第五章では建築家磯崎新の「未来都市は廃墟である」というテーゼが、広島や長崎の爆心地のイメージと重なってくるという点が、インスタ

レーション『電氣的迷宮』(一九六八年)を介して言及されている。

浅田孝という人物が大阪万博の基本構想を打ち立てたという事実は、これまでの大阪万博に関する研究では指摘されることがなかったという意味で非常に重要である。しかし私は浅田の影響が小松左京ばかりでなく、「日本列島改造論」にまで到達するといった指摘により興味を覚えた。また、磯崎新に関しては、ポスト・モダン論全盛だった大学時代に、「つくばセンタービル」が廃墟になった写真を講義で何度も見た記憶があり、講義が終わってからしばしば歩いて見に行ったこのビルが、古代ギリシャや中世ヨーロッパのイメージばかりでなく、爆心地の風景ともつながりがあるかもしれないという点を知り非常に感慨深かった。

こうした戦争と万博と前衛芸術とをつなぐ「線」は、万博芸術が実は戦争美術なのではないかという刺激的な問題設定によってさらに奥行きを増し「面」となっていく。たとえば第二章では、著者の問題意識が、「一九七〇年の岡本太郎は、いわば一九四五年の藤田嗣治を反復している。」と、端的に表現されている。この一文に示されているのは、「万博以後、美術界が万博での活動に触れなくなったことは、敗戦後、戦争記録画の問題が長く、等閑に付されたことと対応している」という認識である。国策芸術とは対極にあるはずの前衛芸術家たちが、なぜ一九七〇年の大阪万博で結集したのか。こうした問いは前衛芸術を糾弾するという要素を持っている。だが、本書はたんに一九七〇年において前衛芸術が終わりを告げたと宣告しているわけではない。著者はその問いを、実は「戦争画こそが万博芸術(博覧会芸術)の反復」なのであるという発想から解き明かそうとしているのである。

戦争美術Ⅱ万博芸術という問題設定は、大阪万博に関する興味深い事実を光を当てる。第八章に次のような部分がある。

磯崎が、その国策ゆえの問題性を頭では理解しながら、けつきよくは万博に参加する「誘惑」に勝てなかったように、戦時統制下にあつてなかなか「理想」を実現できない前衛的な建築家たちにとって満洲は、政治的には大きな問題を抱えながらも、本国のしがらみから自由になれる新天地であつたにちがいない。

「満洲国」の建築と大阪万博とのオーバークラップはたんなる比喩にとどまらない。「電力館」を設計した板倉準三や、万博の事務局スタッフなど、「大阪万博の会場計画」は、「ある意味、かたちを変えて『内地』に折り返された満洲国の復興像」とも思わせるほど、「満洲国」とのかかわりを残している。戦後の文学・芸術運動と満洲との接点について自分なりに研究してはいたが、大阪万博と「満洲国」との接点は、正直考えたことがなかった。次々と投げかけられる本書の問いに、章を変えらるたびに圧倒された。いままで紹介してきた内容以外にも、「環境」や「新陳代謝（メタボリズム）」といった用語から、「実験工房」や「ネオ・ダダ」

の軌跡を追った第三章、第四章、あるいは、「石」や「穴掘り」といった斬新な切り口から一九六〇年代芸術論、そして大阪万博論を展開する第六章、第七章など、万博をめぐる「タイムトラベル」は飽きることがない。

本書を「原爆文学」とのかかわりから考えるならば、「戦争と万博」というときの「戦争」が、「原爆」を非常に強く意識している点で、「原爆」と一九六〇～七〇年代の「文学」を考えるための示唆を与えてくれるのではないかと感じている。また個人的には、「万博」という一大イベントと「文学」との関わりを改めて問い直す必要性を実感してもいる。大阪万博のために『一日二四〇時間』という映画を製作した勅使河原と安部公房は、やはり同じ組み合わせで一九六六年に映画『他人の顔』を製作している。映画の場合、原爆によつて顔にケロイドを負った女性の果たす役割は、小説にくらべてかなり比重が高い。なぜ小説が映画化される時点で「原爆」の問題が前面化してくるのかという問いに関しては、まだ答えが見つからない。しかし、本書を読みすすめているなかで、随所にちりばめられた問いが、手がかりを示してくれているのではないかと感じた。

（美術出版社 二〇〇五年二月 三四九頁 二八〇〇円＋税）